特定非営利活動法人 日本免疫学会

平成 23 年度 Tadamitsu Kishimoto International Travel Award

研究発表報告書

申請者氏名	後藤　義幸	会員番号	0026418
申請者の所属・職名	東京大学医科学研究所炎症免疫学分野・特任研究員		
出席会議名	アメリカ免疫学会（The Meeting of American Association of Immunologist）		
発表論文タイトル	Specific commensal bacteria modulate epithelial glycosylation		

実施結果:

当 Travel Award によってサポートしていただいたた、旅程および研究遂行内容を報告する。

まず、2011 年 5 月 14 日から 5 月 17 日まで、San Francisco, Moscone Center にて開催されたアメリカ免疫学会（The Meeting of American Association of Immunologist : AAI）に参加し、世界最先端の免疫学研究に触れる機会を得た。特に現在注目されている研究分野の一つ、腸内共生細菌と粘膜免疫機構の相互作用に関しては、新進気鋭の若手研究者の最新の研究結果を聞く事ができた。それぞれ、腸内細菌による制御性 T 細胞の誘導や潰瘍性大腸炎などの炎症性腸疾患の誘導、さらに関節リウマチの誘導など、腸内細菌と宿主病態形成に関与する研究が展開されていた。特に、発表者は抗生物質処理法やノトバイオート法、16S rRNA 遺伝子クローンライブラリー法などのメタゲノム解析法を用いて、粘膜免疫細胞と相互作用、もしくは宿主病態形成を誘導する細菌の同定を行っており、最先端の研究の潮流を肌で感じる事ができた。

学会終了後から 2011 年 6 月 4 日まで、現在進行中の共同研究の一環として、ニューヨーク　コロンビア大学医療センターの Ivaylo Ivo Ivanov 博士の研究室を訪れ、博士が所持している遺伝子改変マウスを用いて腸管上皮細胞の糖鎖修飾解析を行った。現在、Ivanov 博士の研究室への留学を念頭に置いており、事前に博士とディスカッション、および研究室の研究環境を確認する事ができた。また、コロンビア大学では日本人も含め多くの新たな友人ができ、今後留学するにあたってニューヨークでの住環境や生活様式など日本との文化の相違について予め知っておくべき貴重な情報を得られたと同時に、自身の英語力不足を自覚する貴重な経験となった。今後は、Ivanov 博士との共同研究を推進していくと共に、これらの情報を基に今後私が日本で行うべき事を粛々と遂行していきたいと考えている。

なお、上記のような極めて貴重な経験を積む機会をいただいた岸本忠三先生に心より感謝を申し上げる次第である。

注）本報告書は手書きでなく、ワープロを使用して作成して下さい。